

日本学術振興会 研究拠点形成事業（A. 先端拠点形成型）

中間評価（平成30（2018）年度採択課題）結果

日本側拠点機関名 神戸大学（特命教授・和氣 弘明）

研究交流課題名 階層横断的グリア脳科学研究のための国際コンソーシアム拠点形成

評価結果（総合的評価）

- A 想定以上の成果をあげつつあり、当初の目標の達成が大いに期待できる。
- B 想定どおりの成果をあげつつあり、現行の努力を継続することによって目標の達成が概ね期待できる。
- C ある程度の成果をあげつつあるが、目標達成のためには一層の努力が必要である。
- D 成果が十分にあるとは言えず、目標の達成が期待できないため、経費の減額または中止が適当であると判断される。

所見

本課題では、若手国際共同研究を含めた複数の国際共同研究を推進し、新型コロナ禍以前に日本側研究者を積極的に相手側研究拠点に派遣したことで、国際研究ネットワークの構築に成功している。そしてそれが、当該分野で国際的な評価の高い論文誌での国際共著論文の発表や、国内外会議の発表として結実している。さらに、学術変革領域研究A「グリアデコーディング：脳-身体連関を規定するグリア情報の読み出しと理解（グリアデコード）」へ発展したということは、数年後に本プロジェクトが終わってもより長期的にグリア研究を支えるこれからの枠組みができたこととなり、残る研究期間の発展が楽しみである。一方、本課題が目指す「国際グリアコンソーシアム」の構築による「技術・リソースの共有化」と「新規技術開発」を実現するためには、双方向性の継続的な人材交流を通じて、研究現場でしか得られないスキルや文化の共有をさらに促す必要があると思われる。

若手研究者育成の面では、若手研究者同士を交流させるセミナーの開催や、若手研究者同士で共同研究の計画を立案させて、その中の優秀な計画に研究費を配分するなど、育成に向けた斬新な取り組みが行われ、それが国際共著論文の発表へと繋がっている。新型コロナ禍以前に若手研究者をネットワークに組み込んだこと、それに続くオンライン交流は、今後のネットワーク維持に奏功すると期待できる。